

黒岩剛仁歌集『野球小僧』

高山邦男

らしさを貫く

どんな場の話だったか、心の花編集部の人間が何人か集まっていた時に、佐佐木幸綱先生が、この中で会社を定年まで勤め上げた人間は結局黒岩だけだったという感慨を言われて、そこから話が進み、一般的な世の中では比較的多いのかも知れないが、短歌の世界では黒岩は非常に珍しい人間だということになった。勿論、ここでは珍しい褒め言葉である。

また、大学は中退した奴が一番偉くて、留年はその次、ちゃんと卒業した奴は大したことがないというような話も聞いたりするが、それもアウトサイダーのやつかみ半分の気概に過ぎず、本当に偉いのはちゃんと卒業した奴に決まっている。黒岩のような人間にとっては失礼千万な話に違いない。しかしながら、個性の強い人間に囲まれて、優等生型の人間がどこに自分の個性があるの

か見極めることはなかなか至難の技なのかもしれない。私は次の一首に注目した。

・ 四十代半ばの俺は訳知りで悍馬たらんと願いしは過去

悍馬たらんとは誰でも一度は願う事ではあるが、若い頃の黒岩作品はいかにも佐佐木幸綱に憧れているような幸綱調の作品が多かった。そうした事なども過去とする自分らしさの境地とその自信、覚悟を感じる歌だと思つた。さらに言えば、この歌集は黒岩が掴み取つた自分らしさに満ちている。

・ 父に連れられ祖父待つ席に向かう折り通路出づれば芝生の緑

・ スタメンの発表聴きつつ父と食むおこわ三色弁当うまし

タイトルになった野球小僧の一連から引いた。ほのぼのとした家族との関係、野球観戦を楽しむわくわくした気持ち、そこから自ずと溢れてくる幸福感が銜いなく表現されている心地よい作品で、黒岩らしさの典型がある。また、これらの作品はそこに留まっているだけでなく固有家族像か一つの時代の典型として、同時代を生き

て来た多くの人々の姿を見せてくれる。

・ 色白の新入社員と酒酌めり鮎は頭から食うのが礼儀

・ 十月の十日は平日仕事あり体育の日たりし面影もなく

・ 同僚にオバマに似たる男いて Good Luck を口癖とせり

黒岩が主戦場としてきた会社に素材を採つた作品で深刻になりすぎない表現に特徴がある。また、観念的すぎたりひねりすぎたりしたら生まれにくいコミカルな軽妙さがあり、そうした作風を選び取っている黒岩らしい作品と言える。このように負に落ちることは歌わず、明るさを前面に押し出す作風は一つのモチーフと言っている。

・ 昨日までコート着ること我慢しつつ何に對する意地か分からぬ

一つの意地とでも言うべき黒岩らしさを貫いているから、時代の典型たりえていて、昭和的など一言で収めきれない普遍的なものがある評価に値する歌集になった。

前歌集から十三年ぶりの歌集だという。間隔が開いたことによりの理由があつたのか定かではないが、満を持してまためた渾身の歌集と言つていいだろう。